# 船井情報科学振興財団　第 2 回留学報告書
# ピッツバーグの冬は相変わらず寒い

長谷川公大
kimihiro@andrew.cmu.edu

2022 年 12 月

米国カーネギーメロン大学計算機科学大学院言語技術研究所[*1]の博士課程に在籍している、長谷川公大です。船井情報科学振興財団の FOS 奨学生第 2 回留学報告書として、今年の 5 月に博士課程に進学してからの研究・学業及び私生活等の振り返りを書きたいと思います。

## 夏学期

通常博士課程は 9 月の秋学期開始から始める人が多いのですが、私は LTI の修士課程からの内部進学であり同じ教員の元で研究を続ける予定だったのもあって、修士課程終了後すぐに博士課程を開始しました。ただ開始はしたのですが、修士課程での疲れも溜まっていたので指導教員に相談し 6 月は日本へ一時帰国して半月は休暇、残りの半月はリモートで作業をすることにしました[*2]。約 1 ヶ月の滞在ではあったのですが、両親や友人等多くの人に会うことができ、よい気分転換になりました。ちょうどタイミングよく船井財団の壮行会が 6 月の上旬にあり、船井財団の同期（数人都合が合わずお会いできなかったのですが）や選考委員の先生方、事務の方々と初めて対面でお会いすることができ、美味しいご飯と共にお話しできて楽しかったです。準備等してくださった事務の方々には改めて感謝いたします。壮行会ではいくつか印象に残っていることがあるのですが、特に、学部留学をされる松尾さんが、「(選考委員の）先生たちもお酒を飲んだらたわいも無い話をするんですね」と言ってたのと事務の斉藤さんがたいへん楽しそうにお酒を嗜んでおられたのが印象的でした。それまで何度かオンラインでの集まりはあったのですが、画面越しと対面とではやはり受ける印象も違うので、集まりに参加できたのはよかったなと思います。

ピッツバーグに戻ってからは、自分のオフィスでの作業を開始しました。修士課程時はプログラムごとに与えられる共有の学習スペースを使っていたのですが、博士課程からは 2・3 人で一部屋を共有するような配置になっています。オフィスメイトはおそらくランダムに選ばれていて、多くの場合指導教員の異なる学生同士が同室になっている印象です。大学によっては同じ指導教員や同じラボの学生と同室になることもある/多いと思うのですが、LTI では異なるシステムをとっているようです。おそらく研究のみでは関わりにくい学生同士の交流の機会を作るとかそんなところだと思われますが、あまり詳しく話を聞いたことはないので、また機会があったら誰かしらに聞いてみたいと思います。夏の間はオフィスメイトはインターンに行っていたよう

[*1] Carnegie Mellon University, School of Computer Science, Language Technologies Institute の訳です。 CMU, SCS, LTI と省略されることが多いです。
[*2] LTI の大学院生は、基本的に夏と冬に 2 週間ずつ休暇を取ることができる規定になっています。

で、オフィスでは 1 人で黙々と過ごしていました。初めのうちは、数年前に交換留学で訪れ、話を聞き、自分もこの人たちのようになりたい、と思わせてくれた当時の博士課程の方々と同じ場所で作業をしていることに込み上げてくるものもあったのですが、それも徐々に薄れ、夏の間建物の中は冷房が効きすぎていたりするので、足が冷えるなとかそんなことを考える程度になりました。

## 秋学期

8 月の後半に正式な博士課程入学者向けのオリエンテーションがあり、秋学期が始まりました。LTI では修士課程の学生も博士課程用の授業を選ぶことができるのですが[*3]、それらの授業を履修していると修士課程の卒業要件としても換算されるし、もし LTI の博士課程に進学した際は博士課程の卒業要件としても換算されるというシステムになっており、LTI での内部進学を希望している学生は博士課程用の授業をとることが多いです。私もそれに従い既に卒業に必要な授業の単位は修士時代に取り終えているので、今学期は研究のみに集中することができました[*4]。修士課程時代はかなりの時間を授業やそれに付随するプロジェクトに充てざるを得ず、その中でなんとか時間を作って研究を進めていたような状態だったので、研究のみに集中できる、自分で管理できる時間が増えた今の状態は、研究をする上でたいへん恵まれているなと感じています。基本的な 1 週間のスケジュールは、週 1 の指導教員との個人ミーティングとラボミーティング、また個人的な研究の他に少し大きめのプロジェクト（教員学生合わせて 20 人程度）にも参加しているので、それのミーティングが週に 2 回ほどといった感じで、それらをペースメーカーとして、なるべく 1 週間のうちに論文を読むなどのインプットの時間とコードを書いて実験をするようなアウトプットの時間をとるように心がけています。ただ、自分で管理できる時間が増えるということは良くも悪くも自分次第になるので、そこの難しさもあるなとは感じています。夏はインプットに偏っていた気もしますし、最近は実験に時間を取られて論文を読む時間が取れてなかったりします。また、何かに触れて焦りを感じて作業時間がその週は長くなるも次の週は疲れが出てか作業時間が短くなる（もしくは体調を崩す）というようなムラが出ることもありました。そこの管理も含めての研究能力だと思うので、試行錯誤しながら工夫しながら自分なりのペースを掴んでいきたいと思います。

ちなみにオフイスに関しては、ハウスメイトがいる場合と同様に、オフィスメイト問題というのもしばしば話には聞きますが（キーボードの音がどうだこうだなど）、今のところこれといった問題もなく過ごせているのでありがたいなと感じています（私自身も特に文句を言われてないので、他 2 人も特に問題に思ってないのだろうと思っています。多分）。

## 余暇・趣味

自分で管理できる時間が増えたこともあり、また健康にも気を使った方がいいだろうとの思いから、秋学期あたりから、週に一回程度ですがジョギングをしたり体育館に行ってバスケットボールをしています[*5]。土日の一般開放の時間に行くとそれなりの数の学生が遊びに来ており[*6]、自然発生的に始まる試合[*7]に参加して楽しんでいます。高校の部活と大学学部時代に少しやって以来ここ数年全くやってこなかったので、最初のうち

---

*3 全く違う授業というよりかは、同じ授業で、宿題が少し多いなどといった違いのことが多かったです。

*4 LTI 内部のシステムには、博士課程から LTI に来た学生は 1 年目、修士から上がってきた場合は 3 年目として扱われ、また、“同じ博士課程 1 年生” でも後者の方が卒業までにかかる時間は少ない場合が多く、卒業へのプレッシャーは高いです。。

*5 日本人 NBA 選手が今シーズンすごく活躍している様を見ているとバスケをしたくなるというのもあります。

*6 2 コートに多いときは 40 人近く来ていたりします。

*7 ピックアップゲームと呼ぶそうです。

は少し走っただけで息を切らして簡単なシュートをバンバン外していたのですが、最近は少しマシになってきたのが嬉しいです。アジア人の学生が来ていることが多いのでそこまで体格的にハンデを感じないことや本格的にやってきた風な人と遊びでやっている人がどちらも混ざっているのが今の私でも楽しめている理由かなと思います。一度体育会系のバスケ部に所属しているっぽい学生（身長 190cm 以上）が入っている試合に参加した時は、怪我しそうで怖いので控えめにプレーしていたのですが、ただのピックアップゲームで生のダンクを見れたので興奮しました。昨年あたりから CMU の二つあるうちの一つの体育館が改築工事に入ったようで、残ったもう一つの体育館を体育の授業、体育会系の部活、そしてサークルが優先して使い、空いた時間が一般開放になるという状態のため土日でも毎週空いているわけではないのですが、今後も怪我しない程度に楽しんでいけたらなと思っています。

他には、お笑いが好きなので 8 月後半ぐらいから M1 グランプリ[*8]の予選の動画をよく見ていました。基本的にはただただ楽しんで見ているのですが、参加者たちが観客を笑かすことを目標とし、自分たちの色味を出したり、既存のお笑いにないものを生み出そうとしたり、逆に王道のしゃべくり漫才の道を磨くなどして、必死にネタを考えてきたんだろうなと思うと、自分たち博士課程の学生にも通ずるものがあるような気がして我に帰ると同時に、自分が面白いと思ったネタをしたコンビにもそんなにネタが刺さらなかったコンビにも、心の中で “頑張れ” と応援したくなる気持ちになります。ちなみに今年の M1 グランプリではさや香さんとヨネダ 2000 さんのファーストラウンドのネタでお腹を抱えました[*9]。

また、最近はアメリカにある日本の漫才に近いものとして、Stand-up Comedy を観始めました。英語字幕を付けながらなので、自分の聞き慣れないアクセントの人のショーでも文字通りの内容はなんとなくわかるのですが、含みを持たせたような言い方をされたり、アメリカ文化[*10]への理解が浅いため、アメリカでの “典型的なもの”、日本語いうところのいわゆる “あるある” を絡めたネタになると、画面の前で「？？？」となることが多いです。例えば、ニューヨークの地下鉄では自分が乗り遅れそうになると何かをドアに挟んでなんとか乗り込もうとする人がいる、というような話の時は、私には面白さよりも “ふーんそんな人がいるんだ” という感情の方が先に来てしまうといったものです[*11]。普段日本の漫才をみている時には意識することは少ないですが、改めて考えてみると、確かにコーンフレークのパッケージ描いてある栄養表示を見たことがないと、その五角形を指して「自分の得意なとこだけで勝負している」というツッコミに笑わないよなと思います[*12]。特に自分が今まで関わってくる機会の少なかった属性を持つような方のショーは分かりにくいと感じる一方[*13]、ネタが文化に依存しすぎてない日常的なことだったりいろいろな国の話をしているものはわかりやすいな、面白なと感じることが多いです[*14]。また日本の漫才と少し雰囲気が違うなと感じるのは、人気なコメディアンになると武道館のような会場でパフォーマンスをするようで、有名な歌手やアイドルのライブのような様相をしていることもあります[*15]。普段自然言語処理の研究[*16]をしたり CMU で学生生活をしている中では触れる機会のあまり多くないことだったりしますし、まだまだ観てきた数も多くないので、飽きが来な

[*8] 年に一度の漫才の大会です。
[*9] 公式 Youtube チャンネルでネタを観られます。
[*10] 人種のるつぼと例えられるように、いわゆる単一のアメリカ文化というものが存在するのかどうかはわかりません。
[*11] ニューヨークに住んだことがある人に一度聞いてみたいです。
[*12] 2019 年の M1 グランプリでミルクボーイさんがされたネタの一部です。
[*13] 例えば、黒人の方のショーで、白人というのは一度は黒人への差別的な表現を使ってみたいものだみたいなことを言って笑いをとっていて、“そうなの。。？” としかなりませんでした。The Standups. Season3. Brian Simpson.
[*14] Gabriel Iglesias のショーは面白かったです。
[*15] ちなみにこの報告書を書くときに少し調べてみると、日本でもかまいたちさんが武道館でお笑いライブを来年するという記事を見かけたので、日本の漫才師も大規模な会場でショーをすることもあるようです。私が知らないだけかもしれません。
[*16] Sarcasm のような文化依存なトピックもあるにはあります。私はあまり詳しくありませんが。

い限りこれからも少しずつ観ていこうかなと思います。

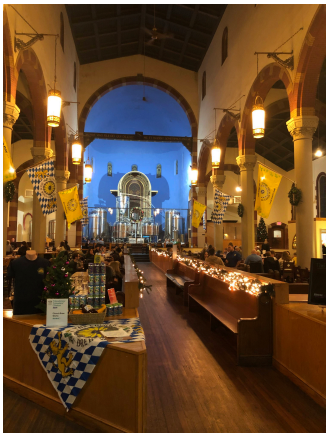
## その他

2017 年度奨学生の大谷さんや 2019 年度奨学生のファムさんとは 3 人で今学期 2 回ほどご飯に行きました[*17]。またそれ以外にも大谷さんには出不精の私をピッツバーグのいろいろなお店や Flight 93 National Memorial(9・11 の際にハイジャックされたが乗員乗客の抵抗により作戦が阻止された飛行機の墜落現場)[*18]に連れてってくださり感謝しています (ページ下部の写真はその一部です) 。来学期あたりで卒業されるご予定なので寂しくなるなと感じています。

最後になりますが、このように不自由ない生活を送り、研究に打ち込む時間が取れているのは船井財団のご支援があってのことであり、たいへん感謝をしています。引き続き、研究・学業に精力的に、でも無理をしすぎず、取り組んでいきたいと思います。

(a) Flight 93 National Memorial

(b) Tower of Voices



(c) Church Brew Works

*17 おそらくファムさんが写真を載せてくださってると思うので様子はそちらをご参照ください。

*18 墜落直前の飛行機からの電話の録音を聞いた時は心にグッとくるものがありました。もし機会があれば訪れてみられると良いかもしれません。